



『アロマ・ティモール』商品のラインアップ



東ティモール女性事業の特産品新ブランド

『アロマ・ティモール』登場

2016年10月7日、東ティモールの女性たちがつくる特産品の統一ブランド『アロマ・ティモール』のお披露目を、東ティモールの首都デリで開催しました。当日は出席してくださった経済担当調整大臣、在東ティモール日本大使、JICA東ティモール事務所長をはじめ、地元産品や女性の活動に関心を持つ多くの方を前に、女性たちが堂々と自分たちの商品を一つ一つ紹介しました。お披露目会に合わせて商品化できたのは、バージンココナッツオイル、はちみつ、イチゴジャム、ピーナッツバター、ハーブティ、バナナチップス、ココナッツクッキー、サゴヤシクッキー、トウモロコシ粉のお菓子の9商品。このうち、バージンココナッツオイルとハーブティは日本にも出荷し、10月下旬に東京と大阪で報告会を開催しました(8頁参照)。

『アロマ・ティモール』のブランド・ロゴにはたくさんのお実をつけた木をあしらひ、女性たちのしなやかさ、温かさ、また一人ではなくみんなで力を合わせて伸びていくイメージを表現しています。ブランド化で生産に拍車がかかるとともに、特産品のラインアップが今後もっと増えていくことも期待しています。

丁寧に手作りにすることに労をいとわない女性たちですが、これまで他地域の女性たちと交流をしたり、商品売ったりすることはどちらかというと人任せでした。自分たちのブランドを手にして、「自分たちの将来は自分たちで決めたい」という言葉も出てくるようになり、これから女性たちのネットワーク化という次のステップを慎重に踏んでいきたいと思

目次	東ティモール 女性事業特産品『アロマ・ティモール』登場…… 1	マレーシア ペナン教育事業…… 6
	東ティモール こだわりのバージンココナッツオイル(VCO)/コーヒー事業: 天候不良で出荷量が半減/マウラウ村での上水道設置完成式…… 2	宮城県石巻市 石巻市北上町の復興状況…… 6
	スリランカ サリー事業 商品取り扱い店舗拡大中/ジャフナ・養殖導入事業 の終了/ムライティブ県の漁村支援…… 3	フェアトレード アールグレイ紅茶/コーヒー生豆、2016クropp /新アロマ・ティモール/寄り道珈琲焙煎店…… 7
	トルコ 実施事業とシリア難民が抱える課題/シリア難民・人びとの声…… 4	パルシツクからのお知らせ…… 8
	パレスチナ ガザの農業復興を目指して/西岸での循環型社会づくり…… 5	ご支援のお願い/東ティモール報告会/ジャフナ・ゲストハウス

■こだわりのバージンココナッツオイル(VCO)

リキサ県、ボボナロ県、コバリマ県の三つの女性グループがバージンココナッツオイル(VCO)を生産しています。生産時の大事なポイントは、①新鮮なココナッツの使用、②発酵時の温湿度管理、③発酵の時間管理です。

無農薬のココナッツを使用するのはもちろん、木から落ちた実を使うのではなく、木の上から採取した実を3日以内に固い殻を割って、新鮮な白い果肉を取り出して压榨します。搾りだした液体には、油分だけでなく水分と多少のミルク分も含まれているので、発酵させてこれらを分離していきます。熟成期間が短すぎる



連携作業で新鮮なココナッツの果肉を除去

と水分が残ってしまい、逆に熟成させすぎると、

ミルク分が発酵しすぎて品質や香りに影響します。VCO作りを行う女性グループのミルタさんは「気候に合わせてVCOの発酵状態も変わる。経験と技術が必要」と言います。女性グループによるVCOは絶妙の匙加減で安定した品質のオイルを生み出しています。(林 知美)

(この事業は、JICA草の根技術協力事業のご支援と皆様からのご寄付で実施しています。)

■コーヒー事業…天候不良で出荷量が半減

エルニーニョ現象の影響で雨季明けがはつきりしないまま、2016年は例年よりも2か月近く遅れて7月半ばからコーヒーの収穫作業が始まりました。コーヒーの木にはたくさんの実がついていて、

して出荷できたのは予測数量のわずか半分でした。



雨の合間に完熟した実を丁寧に収穫

ディリでは、二次加工場の拡張工事を行い、良質のコーヒーを丁寧に取り扱うことのできる環境を整えました。東ティ

モールコーヒー協会設立の動きも始まり、世界のコーヒー市場で東ティモール産コーヒーの評価を高めていこうという準備が着々と進んでいます。(伊藤 淳子)

悪くなったりと、最終的に高品質の豆と

■マウラウ村での上水道設置完成式

2015年11月から作業をはじめたマウラウ村3集落での上水道設置が一部終了し、10月13日に完成式を行いました。

式典には、日本大使館から山本大使の代理でNGO連携無償資金協力の樋口氏が、東ティモール政府からは水道局長のグスタヴォ氏が出席。また、日本からはパルシック代表理事の井上と、東ティモールを訪問されていたコーヒー事業でお世話になっている(株)ゼンシヨールディングス・フェアトレード部の方々にも式典に参加していただきました。マウラウ村に招待者一行が到着すると、まず、伝統的な歓迎の儀式で村の長老たちが歓迎し、共同蛇口でのテープカット。

共同蛇口でのテープカット



蛇口をひねり、水が勢いよく出るはずが……勢いのいいのは音ばかりで肝心の水が出ない……。少しひやりとしたのですが、しばらく待つと、配管の中の空気が押し出され、きれいな水が一気に出てきました。その後、招待者からスピーチをいただき、村の人たちが用意した地元産のサツマイモやバナナなど手作りのスナックとケーキ、シャンパンでお祝いしました。この1年間の苦労が脳裏を横切るとともに、ほっと一息ついた時でした。(高橋 茂人)

(この事業は、日本NGO連携無償資金協力の助成と皆様からのご寄付で実施しています。)



マウラウ村
ドミンゴス村長から
皆様へ

日本大使館とパルシックを通じて、日本の皆様から上水道設置のための支援をいただき、本当にありがとうございます。お蔭で、今回上水道が完成しました。これまで遠くに水を汲みに行かなければならなかったのが、近くできれいな水を得られるようになりました。これで日常生活で水汲みを主に担っている女性や子どもの負担が大きく減ります。まだきれいな水を得られていない集落のために、今後も引き続き支援をよろしくお願いたします。

■サリー事業 商品の取り扱い店舗拡大中

スリランカ北部の女性たちが、南部の女性たちからご寄付いただいた古着サリーをバッグや衣類にリメイクして販売する、サリー・リサイクル事業を実施しています。

2016年度初めから商品の営業に力を入れてきた成果が現れ始め、10月末現在、スリランカ国内で「サリーコネクション」の商品を扱う店舗がコロンボ、その他の観光地で合計24店になりました。女性たちの縫製技術も向上し、商品が観光客市場に受け入れられていることを実感します。

7月には、フランス大使館主催で、ニューヨークで活動するフランス人アーティスト、ヴィッキー・フレモントさんをジャフナに招き、リサイクルアートのワークショップを開催しました。ヴィッキーさんも、サリー商品の一つ、パッチワークバッグを気に入ってくれ、既に10枚近いバッグをニューヨークに送りま



自ら縫製したバッグを持つマカルティニさん

した。彼女が主宰するバザーでバッグが販売されています。サリーのパッチワークの上から手で刺繍を施したカラフルなバッグは、スリランカ国内でも人気で、注文に生産が追いつかない状態です。

バッグの刺繍は細かな手作業のため、ミシンだけの作業に比べてきれいに作るのが難しく、メンバーの中でも限られた女性たちだけが作っています。中でもきれいに刺繍をする一人、ムライティブ県コクライ村のマカルティニさんは21歳。高校に進学する機会がなく、サリー事業に参加するまでは、一緒に暮らす叔母さんの家で家事の手伝いをしていました。

刺繍の丁寧さは段違いで、彼女が作った商品は一目で違いが分かるほど。とてもシャイで多くを語らない彼女ですが、叔母さんによると、私たちが彼女の技術をいつも高く評価するので、最近洋裁を仕事にしたいとの夢を話すようになったそうです。

2017年は、さらに商品の市場を広げること、同時にムライティブで新たなグループを作って商品の生産量も同時に増やすことが目標です。

(伊藤 文、籠谷 佳奈)

(この事業は、JICA草の根技術協力事業のご支援と皆様からのご寄付で実施しています。)

■ジャフナ・養殖導入事業の終了―銀行機能を果たすカニの畜養

2013年10月からジャフナ島の島嶼部で実施してきた持続可能な養殖導入事業が終了しました。3つの村でナマコと海藻の養殖、カニの畜養を導入しました。カニの畜養は、未成熟なカニをケージに入れて育てるというシンプルな仕組みですが、成熟させることで一匹の価格が2000ルピー(約1500円)近く上がることもあります。盗難被害さえなければ確実に収入を増やせる方法で、収入向上と資源保全につながっています。「ケージに入れて通常は2週間ほどで取り出す

が、現金が必要な場合には早く取り出し

て売ることもある」との話も聞かれ、農家の家畜のように、銀行の貯蓄のような役割をも果たしていることが分かりました。

ナマコと海藻については、試行錯誤が続いています。天候不順にどう対処するか、育ちやすい環境をどのように整備するかなど、探求熱心な漁師さんが収穫を増やす努力を続けています。(西森 光子)

(この事業は、三井物産環境基金の助成と、皆様からのご寄付で実施しました。)



ケージでのカニの畜養

■ムライティブ県の漁村支援―沿岸部から内陸部の漁民支援へ

2013年9月から行ってきた、スリランカ北部ムライティブ県の帰還漁民を対象にした生活再建と生計支援は、2016年11月をもって終了を迎えました。

沿岸部のマリタイムパットゥ郡で、公民館、せり場や漁協休憩所の建設、最終年には稚魚の放流やカニの畜養による持続可能な漁業の導入等を実施し、内戦後の漁村の復興を支援してきました。この事業でカニの



淡水池で魚をする漁民

畜養を始めたチェマライ村のティルチェルバムさんは、「2週間足らずで3000ルピー(約2200円)もの副収入を得ることが出来て家族みんな喜んでい

る。これからも続けていきたい」と話しています。今後は、沿岸部よりさらに生活の貧窮した内陸部の淡水池で生計を立てる漁民を対象に、淡水池での放流養殖の導入と漁協の強化による生活の安定を目指します。

(飯田 彰)

(この事業は、日本NGO連携無償資金協力の助成と、皆様からのご寄付で実施しています。)

■トルコでの実施事業とシリア難民が抱える課題

トルコでシリア難民に対する支援を開始し、1年が経過しました。対象地であるシヤルウルファ県は、トルコで最もシリア難民の多い南東部に位置します。ほとんどのシリア人世帯は家賃を支払えるだけの収入がなく、家賃のかからないテントや土壁造りの小屋、建設中の家屋などで暮らしています。衛生状態は劣悪で、食糧も慢性的に不足している上、冬の寒さをしのぐための防寒用品もほとんど持っていません。シリア難民にとって仕事を見つけることは容易ではなく、仕事が見つかったとしても、多くが農作業や工場での長時間・低賃金の日雇い労働です。パルシックではそのように困窮した状況で暮らしているハラノ市とシヤルウルファ市郊外のシリア難民約1450世帯を対象に食糧や衛生用品、毛布や冬服が購入できるパウチャーを支給しています。同時に懸念されるのは子どもたちが直面している問題です。シリア難民の子どもたちは現地の学校に受け入れてもらえないことも多く、家計が苦しい状況と相まって、多くの子どもたちが大人よりずっと低い賃金で働いています。2011年に始まって既に6年が経過してしまったシリア紛争の中で、長い間学校に行けないまま取り残され、母国語であるアラビア語の読み書きさえできない子どもが大勢います。今後は食糧支援にとどまらず、未来の社会を築いていく子どもたちへの支援も開始する予定です。（大野木）



初めて食糧支援を受ける世帯を訪問



(この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と、皆様からのご寄付で実施しています。)

シリア難民・人びとの声 シリアでの戦禍からトルコに逃れてきた人びとの暮らし、声をお伝えします。

アリ君 (10歳) アリ君

シリアで戦争が始まった頃から、僕の家族は少しずつ貧しくなっていました。お父さんが僕たち子どもを守るために、家にあるものすべてを売ってしまった時は最悪な気分でした。トルコの国境を越えるときは、お父さんが密輸業者に頼みました。その時僕は、人生のなかでいちばん苦しいと感じました。今、お父さんは道端でケーキを売っていますが収入はほとんどありません。僕はとにかく勉強がしたいです。勉強が好きだったし、友だちが恋しいです。早く戦争が終わって自分の学校に戻ることが、僕の希望です。



マハメットさん (38歳・男性)

3年前、妻と16人の子どもを連れてシリアから避難してきました。シリア国内の移動も非常に危険で、普通なら4時間で到着する街まで1日かかりました。トルコに移住した当初は、市の中心に住み野菜市場で働いていましたが、収入が低く家賃や物価が高いため、生活が本当に苦しかったです。街や村を点々と移住してきましたが、もう新しい場所へ移ることに疲れました。自分は安定した職に就くこともできず、子どもは教育を受けられず、この先どうやっていくのか、不安でひどく思い悩むことが多々あります。



マハメットさんの子ども

ハサンさん (36歳・男性)

ハサンさんの家の様子

IS(「イスラム国」)がシリアの私たちが住む街を攻撃したので、トルコに逃れてきました。国境を越えるのは非常に危険でしたし、私の家族はほとんどなにも持たずシリアを離れました。村の親切なトルコ人の支えにより、住居や仕事を頂きました。今は鉄職人として働いていますが収入が非常に少なく、トルコでずっと生活できるとは考えられません。私はただ、シリアの状況が落ち着くこと、そしてシリアにある私の家に帰ることを待ち望んでいます。



■ガザの農業復興を目指して…温室再建支援

イスラエルによるガザ封鎖より10年、ガザ侵攻による壊滅的な破壊から2年となる2016年、パルシックは地域の持続発展性により焦点を当てた活動に取り組んでいます。その一つとして、地域の農業復興を長く下支えるため、支援の遅れが目立つ農業用温室の再建を支援してきました。

9月末のある日のこと。ガザ地区南部ハン・ユニス地域で農業を営むオマールさん(52)は、再建された温室を見つけていました。

2014年の戦争以前、オマールさん



温室でトマト栽培を再開できたオマールさん

は2000㎡の温室でトマトやモロヘイヤを育てており、生産は軌道に乗っていました。しかし、イスラエル軍の地上侵攻で温室は完全に破壊され、ゴミの山と化した残骸を見た時は2日間茫然自失でも考えられなかったと言います。その後、細々とした露地栽培で家族を養うのがやっとの状態のまま、2年が経っていました。

ガザ侵攻で全壊した農業用温室326棟の再建は、2016年まで全くの手付かずでした。主な理由は、イスラエルによる資材の厳しい輸入規制です。パルシックは、規制対象となっている温室支柱の鉄パイプや雨どいの木材をガザ地区内で手に入る資材で代用するとともに、補助材の追加により強度を確保しながら、小規模農家31世帯の温室再建を支援してきました。

温室の完成後、オマールさんは再び家族を養う家長としての責任を感じられるようになったと言います。「いまだに裕福ではありませんが、温室があれば少なくとも10年は何とか生活をしのいでいけるでしょう。体に魂が再び宿った気分です」と笑顔を見せました。(盛田)

(この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と、皆様からの「寄付で実施しています。)

■パレスチナ西岸での循環型社会づくり

パレスチナ自治区ヨルダン川西岸はもともと資源が乏しい上に、イスラエルの占領下でコミュニティが分断され、物の行き来が不安定です。だからこそ、地域で捨てられるものを資源として活用する循環型社会づくりを目指そうと、2016年の6月から北部ナブルス県ジャマイン町で事業を開始しました。女性組合のメンバーや中学校の生徒たちと、生ごみや環境教育に取り組んでいます。

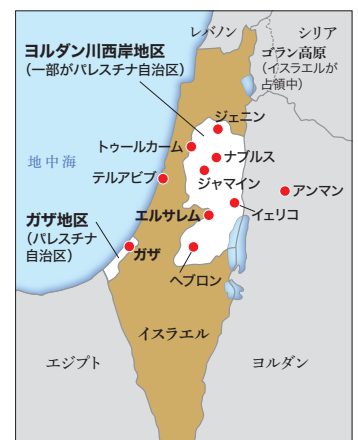
8月、有機ごみの再利用について理解を深めるため、山形県長井市で循環型社会づくりの市民運動(レインボープラン)を立ち上げた菅野芳秀さんを招へいました。長井市では現在、家庭の生ごみがほぼ100%有機堆肥の原料として再利用され、その堆肥で栽培された作物

中学校の生徒たちとのワークショップ。菅野さんの話に聞き入る子どもたち



が食卓に上るといいう、地域内での有機物の循環が実現されています。菅野さんはワークショップで、有機ごみは豊かな土づくり・健康づくりの良い材料になることを伝えるとともに、長井市では婦人会の協力が大きかったこと、子どもが家庭で生ゴミ分別の厳しい「監視人」となつて貢献したことに触れ、ジャマインの女性や生徒たちにエールを送りました。また、菅野さんからは、これまで暖房の燃料以外には十分に活用されてこなかったオリーブの搾りかすが、堆肥の原料として有用との助言をいただきました。参加者からは、「生ごみでの堆肥作りは地域全体の利益になることを周りの人に伝えたい」「オリーブの搾りかすの活用は目からうろこ」などの声が上がりました。今、オリーブの搾りかすを用いた堆肥作りの準備を進めています。(廣本)

(この事業は、地球環境基金の助成と、皆様からの「寄付で実施しています。)



パレスチナのガザ地区と西岸地区

■マレーシア・ペナン教育事業～日本から大学生・高校生が訪れる場所に

2015年度から始めた、ペナンでの一か月間の夏期英語研修（8月13日～9月11日）に今年は、清泉水子大学の3名の学生が参加しました。週末の特別講義を、英国の大学で教えた経歴のあるギャレス先生が担当。ペナンの歴史や文化についてのユニークな英語授業が行われ、「楽しく理解できました」と3人の参加学生が帰国後に話してくれました。週末には、マングローブ植林と漁村でのホームステイの他、ロヒンギャ難民の子どもたちとの交流もありました。その1週間前には、スーパードグロバル・ハイスクール指定校の成田国際高校の16名の高校生と引率の先生2名がペナンを訪問。「観光」と「環境」をテーマにした3日間のペナン訪問で、多民族社会マレーシ

アが、急激な開発の中で抱える課題を感じると同時に、日本社会について見つめるきっかけにもなったとのことでした。

日本の学生にマングローブ植林の意義を伝え植林を指導したPIFWA（ペナン沿岸漁民福利協会）は、森林局や漁業省との連携を強めつつあります。8月中旬には国際会議や全国的な展示会に招待され、これまでの経験や企業のCSRによる植林の広がりについて発表する機会を得ました。マングローブ植林を通じて環境に貢献する団体としてマレーシア国内で知られるようになっていきます。

今年では少人数ではありますが、日本からの訪問者とペナンの人たちとの交流が実現し、その結果、ペナンでも日本でも人のつながりが広がりました。この広がりが確かなものになり、人びとがともに生きて行く関係が広がっていくことを目指していきたいです。

（大塚 照代）

（PIFWAの植林事業は、イオン環境財団の助成と、皆様からのご寄付で実施しています。）



日本の高校生がマングローブ植林を体験

■石巻市北上町の復興状況～東日本大震災から5年半の歳月を経て

2011年3月11日の東日本大震災から5年半の月日が流れました。パルシックが活動を続けている石巻市北上町では、被災された住民の皆さんは5年以上の仮設住宅での生活を経て、徐々に仮設を出て高台移転地に建てられた家に移り始めています。北上町の最大の仮設住宅だった仮設にっこりサンパーク団地の高台移転先の造成も進み、既に10軒の建設が完了しています。現在はさらに建設が進み、建設ラッシュとも言える状況です。

十三浜では、パルシックが緊急期にわかめの加工用テナントを支援した「鶴の助」さんが、昨年夏にわかめや昆布の加工場を建設しました。より多くの消費者の方に肉厚で美味しい十三浜のわかめや昆布を知ってもらおうと、販売活動にも熱心に取り組んでおられます。10月に東京で行われた「土と平和の祭典」では、わかめが大人気で完売となりました！

パルシックが高齢の被災者の生活不活発病を防ぐために農業・食品加工事業を実施してきた新古里農園では、2015年5月までパルシックのスタッフだった西村陽子さんを中心に、農園で栽培されるハマナスを使ったジャムやお茶の商品化が進められています。「地元のイベントやお土産品として販売できれば」と、



西村さんは話しています。

地元の女性たちを中心に結成された北上応援隊は、今年も元気に活躍しています。地元の人が地域への愛着を持って読んでもらえるようにと、これまで発行してきた「きたかみ かわらばん」を大きく刷新しました。新たな「かわらばん」は、石巻かほく新聞にも取り上げていただきました。同時に、高台移転先での自治会の結成に向けて、住民自治の先進地を住民の皆さんの有志と訪問したり、ワークショップを支援したりと、地域の復興に取り組んでいます。（西森 光子）
（復興応援隊事業は、宮城県から受託して実施しています。）

**アールグレイ紅茶
生産者共同出荷グループの挑戦**

組合参加農家とそのご家族

アールグレイ紅茶の産地、スリランカのデニヤヤでは、2016年6月に日本人駐在員が現地を離れ、いよいよ本格的に生産者グループは自立運営に挑んでいます。有機で品質の良い紅茶を出荷し収入



を安定的に得ることはもちろん、組合としての基盤をつくって運営できるように、組合局への登録準備を進めています。登録完了まではあと1歩です。パルシクとしては、もっと多くの紅茶を売ることでの自立化を応援すべく、営業に力を入れようと決意を新たにしたところ……。2016年9月にアールグレイ紅茶を載せた船が横浜港に到着。が、なんと、ふたをあけてみると、コンテナ1つ分ほぼ全ての紅茶のパッケージに不備が見られました。包材の保管状態が悪くなかったため、糊が弱くなり、パッケージの層と層の間に空気が入ったり、剥がれが発生したりしていました。幸い茶葉には問題がなく、現在は割引価格にして販売しています。ぜひこの機会にたくさんお買い求めお助けいただきたく、ご協力をよろしくお願いいたします。詳しくは同封の別紙をご覧ください！

「ハイビスカスティー」
「バージンココナッツオイル」
も加わりました

**アロマ・ティモールの
新たなパッケージ！**

東ティモールの女性たちがつくるハーブティー『アロマ・ティモール』のパッケージをリニューアルしました。「ハイビスカス」が新たに加わり全5種類の販売です。ハイビスカスティーはルビーのような透き通った色で、飲むと口の中に甘酸っぱさが広がります。クエン酸やビタミンCが含まれているので、疲れた体に元気を取り戻してくれます。かつてはクレオパトラも愛飲した“美のハーブティー”とも言われているそう……。なお、これまで販売していました「バジルの花&葉」でできたバジルティーの日本での販売は、2016年9月で終了しました。ご愛顧ありがとうございました。現在は、東ティモール国内で料理用スパイスとして販売しています。）

さらに、新商品「バージンココナッツオイル」も180本の数量限定で入荷しました。無農薬・無化学肥料のココナッツを、採ってすぐに丁寧に加工しました（2頁右上参照）。料理やお菓子作りのみならず、手や髪につけても良いといわれています。ご興味のある方は、どうぞお早目にご注文ください。



ハーブティー新パッケージ

**コーヒー生豆
2016年クロープ 第1便が日本に到着！**

東ティモールのマウベシ郡より、ココマウグループのコーヒー生豆が10月下旬に日本に到着しました。今回は8集落からの集落別の豆と、グループ全体の豆の全9種類。同じマウベシ郡の豆でも、畑の標高や陽の当たり方などで、味が少しずつ異なります。

パルシク東京事務所では、現地のコーヒーチームからの集落別情報をもとに、9種類の豆のカッピング（テイスティング）をして、味の違いを確認します。私たちには難しい作業ですが「今年の味」に出会える最も楽しい仕事です。

「味の違いを試したい！」という方には、生豆飲み比べセット&手焙煎器の購入がおすすめです。また『カフェ・ティモール』の豆、粉、ドリップコーヒーも、農作物なので生豆の収穫年によって少しずつ味わいが異なります。産地を想いながら飲むコーヒーは、美味しさもひときわ増します……ぜひお楽しみください！



手焙煎器イメージ



コーヒーチームのリーダー、ネルソンも張り切りました！

ちょっと
寄り道♪
珈琲焙煎店



店主の岩鼻さん（右）とお客さん

岩手県釜石を中心とした三陸海岸一帯でコーヒーを提供されている、Happiece Coffee（ハピスココーヒー）さん。なんとお店はミニバスを改装した移動式！店主の岩鼻さんは、かつてパルシクのボランティアとして、イベント出店の際に美味しい東ティモールコーヒーを淹れて、活動を支えてくれた仲間でもあります。岩鼻さんが目指すのは「復興への長い道のりと長く続く困難に対して、お互いに支えあう地域コミュニティ文化を醸成し、その礎となる」こと。

三陸方面へお出かけの際は、心もあたたかくなるコーヒーを飲み、ぜひ、訪れてみてください。

* 出店場所はホームページをご確認ください。

Happiece Coffee（ハピスココーヒー）

URL : <http://happiece.com/>

Mail : shinsuke_iwahana@happiece.com

会員になってパルシックを支えてください。

パルシックは設立から8年目に入りました。この数年間、皆様のご支援を得て、東日本大震災への対応、パレスチナの緊急事態への支援の開始、シリア難民への支援の開始など、切実なニーズに応えるべく事業を続けてまいりました。同時に、東ティモールのコーヒー、スリランカの紅茶を一人でも多くの方に飲んでいただくことで現地の農家を支えるとともに、パルシックの基盤をも強化しようと商品の販売に注力してきました。コーヒー、紅茶を多くの方に買っていただくための努力をまだまだ続けなければなりません。今年から並行して、会員を増やす努力を開始しました。設立時、30名の会員の方で出発しました。今は80名の方が会員としてパルシックを支えてくださっています。活動の幅も広がってきましたので、より多くの方に関心を抱いていただき、周りの方にも広めていただけるよう、新しい会員を迎えたいと願う次第です。年会費として10,000円をいただくことが恐縮ではありますが、ぜひ会員となってパルシックの活動を支えてください。(井上 礼子)

★お申し込み方法

メールまたは電話、ファックスでご一報ください。会員申込書をお送りします。

★会費

会員 10,000円

★年2回のニュースレターや活動報告書・計画の送付、事業報告会やイベントのご案内をいち早く差し上げるほか、会員メーリングリストにご参加いただけます。2016年12月末までに会員になっていただいた方には、パルシックのフェアトレード商品を1つ差し上げます。

東ティモール報告会、大阪と東京で開催しました



事業の報告をする伊藤と会場の様子

2008年から開始した東ティモールの女性の生活向上支援(1頁参照)は、2013年10月から事業地を拡大し、現在は東ティモール内の5県13グループの女性たちが加工品づくりに取り組んでいます。2013年の女性グループの拡大から3年の時を経て、この度、グループ統一の特産品ブランド「アロマ・ティモール」を立ち上げたのに合わせ、日本にもその新商品が入荷しました。商品のお披露目とともに、駐在歴16年の東ティモール事務所代表、伊藤淳子が、大阪(10月22日)と東京(10月29日)の2会場で活動報告を行いました。

伊藤による現地報告が5年ぶりとなったこともあってか、両会場ともに東ティモールでこ

れまでに知り合った方々が大量お越しくださいました。大阪では、まるで東ティモール同窓会のように、ほのぼのとした雰囲気にも包まれました。東京会場には、東ティモールツアーに参加された方々も来られ、ツアーの感想をお話していただきながら、東ティモールや女性たちに想いを馳せました。

ご用意した5種類のハーブティーの試飲、ココナッツオイルや日本では発売しないバナナチップスなどの試食も、みなさまに楽しんでいただけたようです。

新商品の詳細は別紙の商品案内をご覧ください!

*この報告会は大竹財団の助成を得て実施しました。

ジャフナに より広いゲストハウスをオープン!

2014年夏にオープンした KAIS guesthouse (カイス・ゲストハウス)は、当初苦勞もありましたが、その後宿泊予約サイト(Booking.com)でも高評価を得る人気の宿となり、多くの旅行者の方にお泊りいただいています。より多くの方に宿泊いただけるよう、2016年8月に新たなゲストハウス(KAIS city guesthouse)をオープンしました。ジャフナにお越しの際はぜひご利用ください!メールでパルシックにご一報いただければ、詳細をお伝えいたします。



カイス・ゲストハウスの食事



カイス・シティ・ゲストハウスのベランダ

カイス・シティ・ゲストハウスの外観

皆さまのご支援によって 支えられています

パルシックの活動へのご寄付を随時受け付けております。郵便局、銀行からご寄付いただけます。

- 郵便局からの寄付
郵便振替口座：00140-8-536957
口座名：パルシック
- 銀行からの寄付
三井住友銀行 神田支店(普) 2384136
口座名義：特定非営利活動法人パルシック

※銀行からお振り込みの際は、ご住所とお名前をご一報ください。